

梅雨が明け、沖縄に眩しい夏が戻ってくる。朝から強い日差しが降り注ぎ、カート道を抜ける風も芝の匂いも、全部が「沖縄の夏」だ。表紙写真の青空と入道雲、照り返すグリーンを眺めるたびに、この島の夏だけが持つ独特の空気感が蘇ってくる。スコアを追いかける日も楽しいけれど、「景色そのものがご褒美」と感じられる時間こそ、沖縄に生きることの豊かさかもしれない。

今号の報告コーナーは、令和7年度勤務医部会講演会から幕を開けた。日本医師会・城守国斗常任理事による講演では、急激な物価高騰や賃金上昇に直面する医療機関経営の現状、医師の働き方改革、そして将来の医師偏在対策まで、幅広いテーマが網羅された。質疑応答でも中央での交渉経緯や現場の課題について活発な意見交換が行われ、参加者の関心の高さがその熱量に表れていた。

また、4月3日に開催された第18回新研修医のためのシンポジウム・歓迎レセプションには128名の新研修医が参加し、会場は春らしい熱気に包まれた。医師としての第一歩を踏み出した若い先生方の門出を、心から祝福したい。

日医関連の報告も充実した号となった。4月4日には沖縄県医師会担当による第20回日本医師会男女共同参画フォーラムが那覇で開催され、「世代・ジェンダーをこえてちむどんどん」をテーマに全国から関係者が集い、活発な議論が交わされた。世代も性別も働き方も異なる中で、それぞれが自分らしく輝ける医療環境をい

かに築くか、その問いは、沖縄の地で確かな手応えとともに深められたように思う。

4月15日の新たな地域医療構想に関する担当理事連絡協議会では、2040年を見据えた医療提供体制の包括的な再編の方向性が示された。「集約と効率化」が進む中、地域の実情に即した運営が担保されるよう、医師会として引き続き声を上げていくことが求められる。

4月19日の学校保健講習会では、熱中症対策、子どもの自殺対策、性教育、花粉症重症化ゼロ作戦など、現場のリアルな課題が多岐にわたり取り上げられた。やるべきことが増える一方で効率化が求められる時代に、「持続可能な対応」を模索し続けることの大切さを改めて感じた。

生涯教育コーナーでは、琉球大学病院救命救急センターの知念巧先生に「新しいBLSガイドライン2025」をご執筆いただいた。改訂のポイントをわかりやすく整理した内容で、すべての先生方にご一読をお勧めしたい。

インタビューコーナーでは、沖縄県立総合精神保健福祉センター所長・牧志倫先生にご登壇いただき、精神保健福祉センターの役割や地域精神保健の最前線を語っていただいた。

月間行事では、前城達次先生によるMASLDに関する特集が掲載されている。病診連携の重要性を改めて認識させられる一編だ。

定期的に編集後記の担当が回ってくる。会報をまとめる作業は、原稿と向き合いながら県内医療の息吹を肌で感じる、編集委員にとって得難い時間でもある。

広報委員 稲富 仁

